

# 山陰地方大山山麓にみる弥生時代の家と村

鳥取県教育委員会文化財課 濱田竜彦

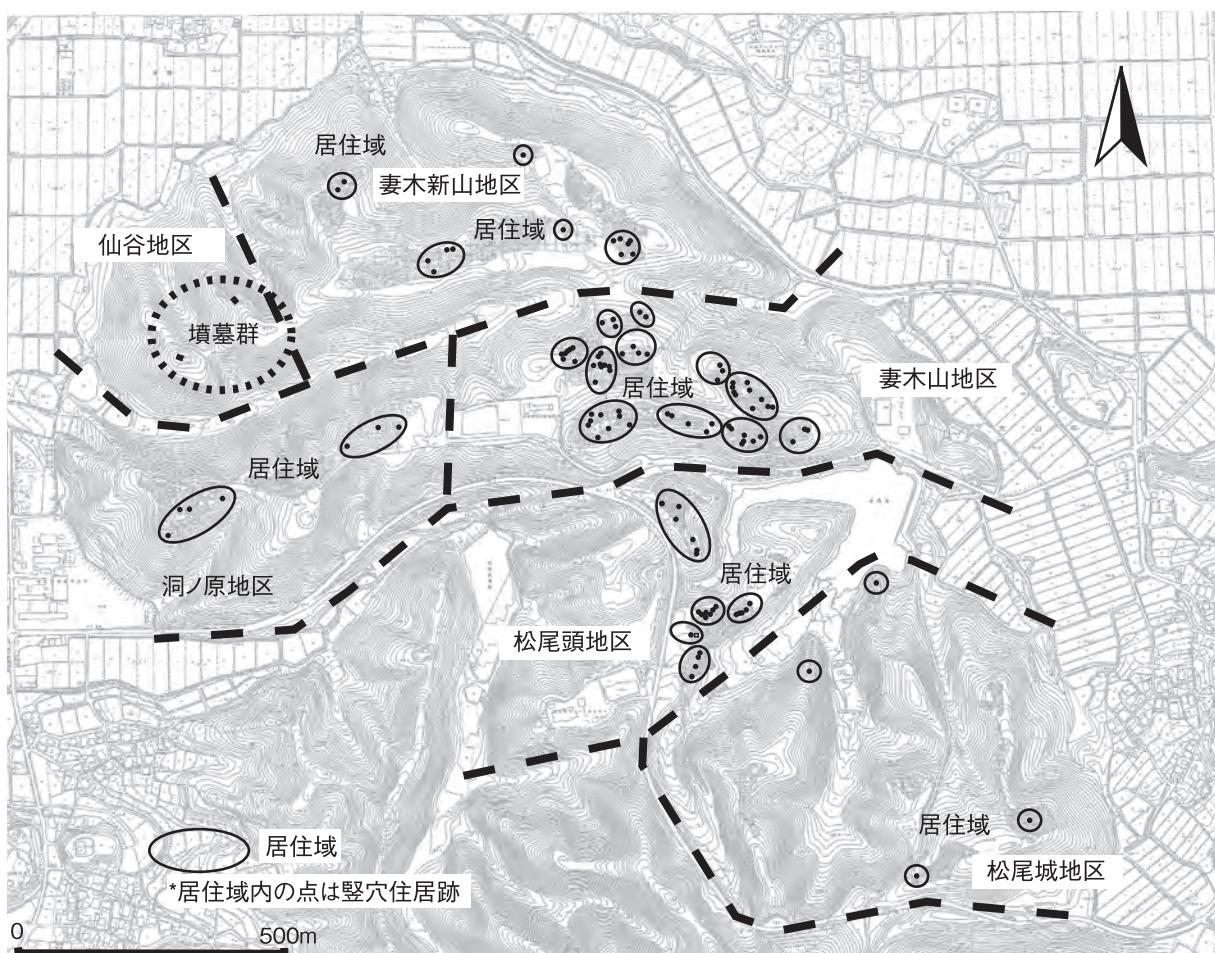
近年、山陰地方では、鳥取県中・西部の大山山麓において弥生時代中・後期の集落遺跡の調査事例が充実している。中期後半の遺跡には2～3棟の竪穴住居跡からなる集落と考えられるものが多く、その分布は分散的である。後期になると、中期の1集落規模に相当する規模の居住の単位が複数集合して、大規模で複合的な集落が形成される。大山町・米子市妻木晩田遺跡は、中期後葉までは小規模な集落であったが、後期初頭以降、複数の居住域が丘陵上に現れ、後期後葉には20戸以上の居住域が丘陵上に展開している（図1）。こうした動きは、墳丘墓の造営と軌を一にはじまっており、墳丘墓に象徴される有力集団を紐帶とする新しい集団社会の形成がうかがわれる。

次に集落の構造を概観する。中期後葉の集落が検出された倉吉市関金町大山池遺跡（図2）には、2棟の竪穴住居跡と小型の掘立柱建物跡が分布する空間（空間A）と、独立棟持柱や庇をともなうものを含む中・大型の掘立柱建物跡が分布する空間（空間B）があり、集落内に2つの空間が認められる。遺構以外に空間の機能差を示す資料を欠くが、竪穴住居跡を伴う空間Aは日常の生活の場であったと考えられよう。一方、空間Bの理解には、大山町茶畠山道遺跡（図3）の調査が参考になる。中期中葉の中・大型掘立柱建物跡で構成される空間には独立棟持柱を伴う大型の掘立柱建物跡があり、その付近には赤色塗彩された土器などが廃棄された土坑などがある。周囲からは銅鐸形や分銅形の土製品なども出土しており、祭祀に係わる場であった可能性が想起される。

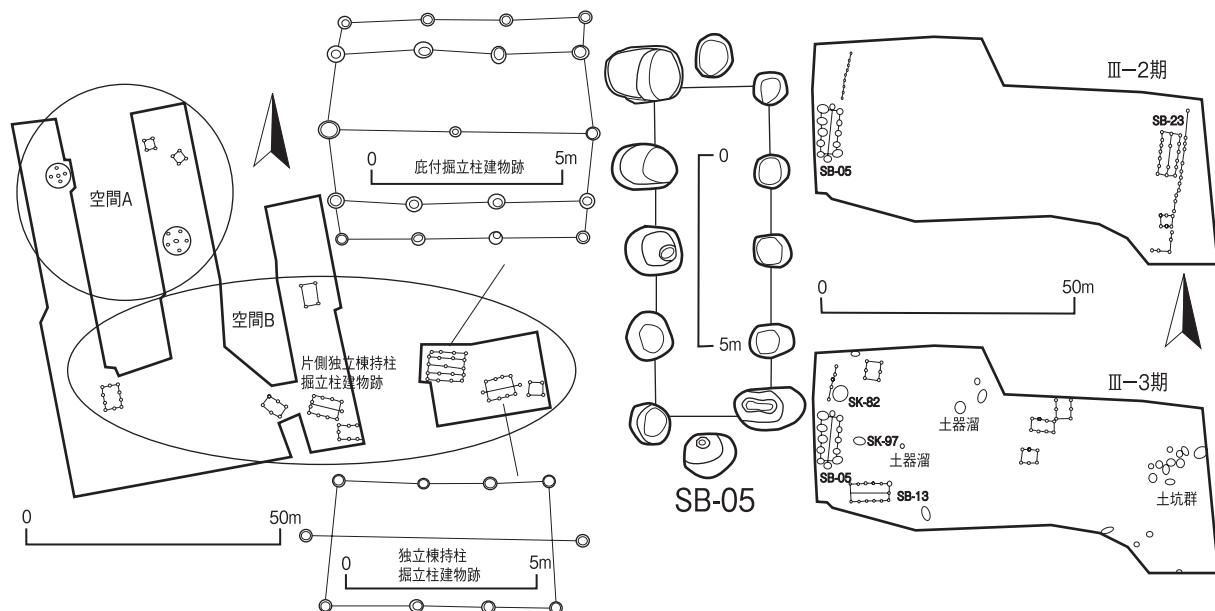
ところが、後期の集落遺跡には中期の集落のように分節化した空間を見いだしにくい。妻木晩田遺跡では後期後葉に両庇をともなう大型掘立柱建物跡が特定の居住域に付帯している（図4）。同規模・形態の建物跡が他ではなく、最盛期の集落を象徴する建造物がここに存在したと考えられるが、妻木晩田遺跡では特定の集団がこうした施設を所有・管理していたと考えられよう。

また、妻木晩田遺跡の各居住域における竪穴住居跡や掘立柱建物跡の在り方は、地形の制約によるバリエーションはあるけれど、長期に居住が継続するような場所、とりわけ緩やかに起伏した丘陵部には、頂部に空閑地が設けられ、少し下った緩斜面に竪穴住居跡が環状に配置されることが一般的である（図5）。こうした在り方は居住期間を通じて維持されることが多く、土地の利用、居住のデザインが経年に堅持されていることがわかる。倉吉市コザンコウ遺跡は短期的な居住が想定される集落遺跡で、後期後葉に埋没した3棟の竪穴住居跡が検出されている。一定の距離をおいて分布する各竪穴住居跡には掘立柱建物跡と貯蔵穴が伴っており、各世帯が各々2種類の貯蔵施設を保有していた状況がうかがわれる。ただし、掘立柱建物跡や貯蔵穴が群在する居住域が妻木晩田遺跡などにあることから（図4・5）、貯蔵施設を複数の世帯で共同管理している集団もあったとみられる。

鳥取県内では焼失住居跡が多数検出されており、妻木晩田遺跡では竪穴住居の復元整備も行われている（図6）。竪穴住居跡の平面形は、後期前半まで円形が卓越するが、後半以降、方形を呈すものが増加する。しかし、方形の竪穴に円形の周堤が伴うこともあり、竪穴が方形であっても、上屋を作成するサスを中心に集まる求心的な構造のものが少なくないと予想される。

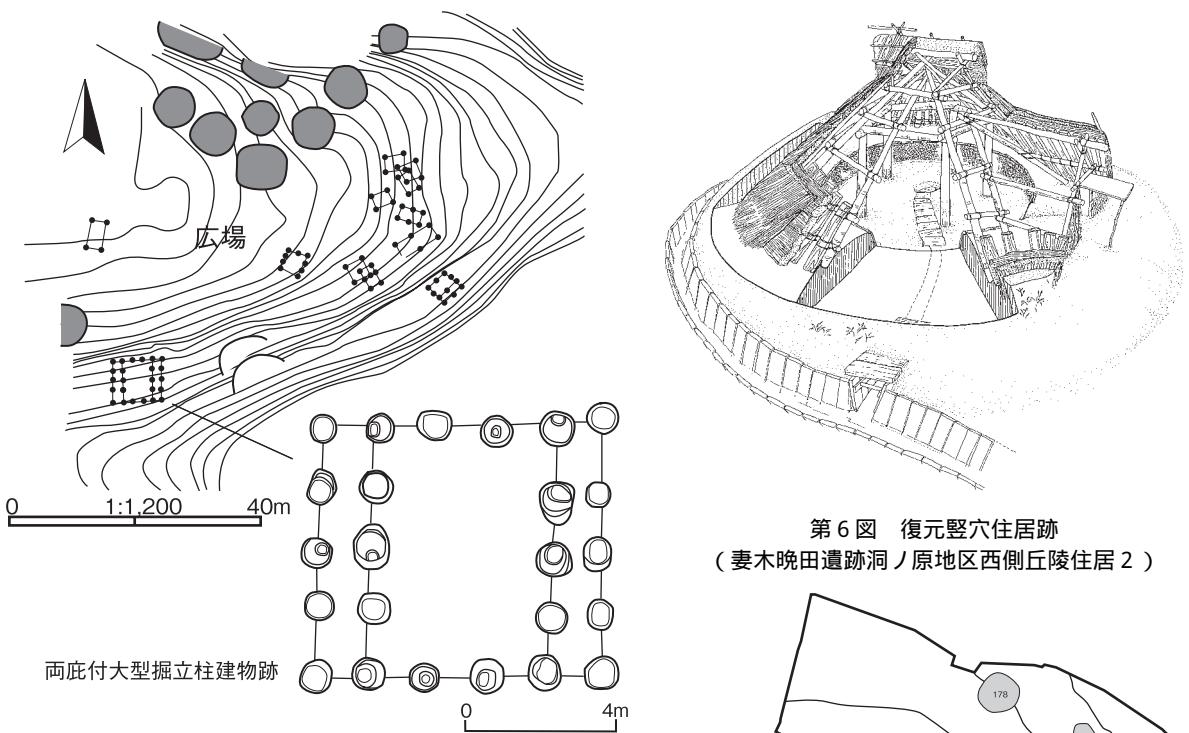


第1図 妻木晩田遺跡の居住域（後期後葉）



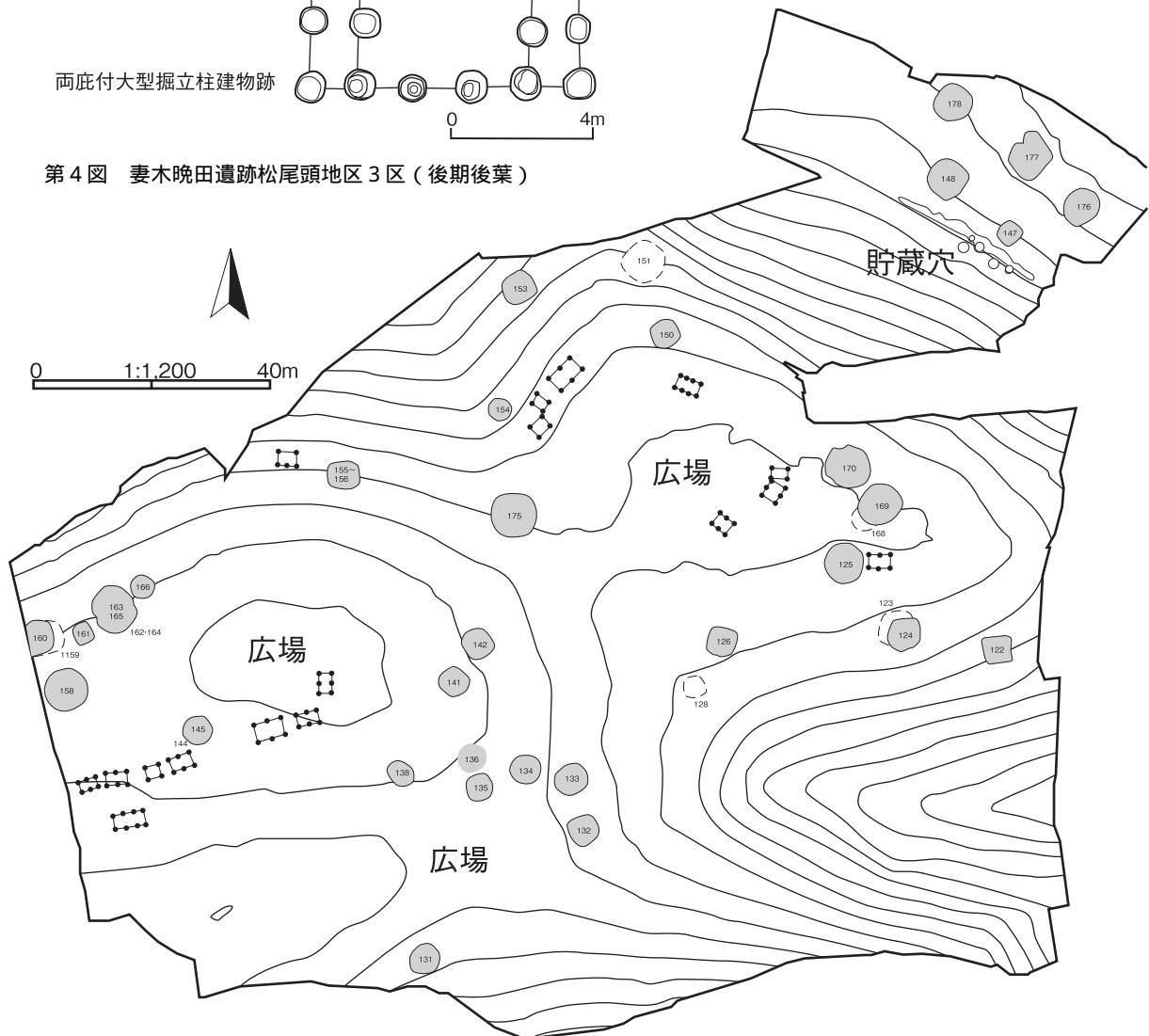
第2図 大山池遺跡（中期後葉）

第3図 茶畑山道遺跡（中期中葉）



第4図 妻木晚田遺跡松尾頭地区 3区（後期後葉）

第6図 復元竪穴住居跡  
(妻木晚田遺跡洞ノ原地区西側丘陵住居 2)



第5図 妻木晚田遺跡妻木山地区 3～7区（後期後葉）